

『沖縄の火種(ウチナーヌウチケビー) 戦果アギヤーの1947年』

登場人物

作 竹内一郎

【アギヤー】

金城清真

喜屋武剛史

具志堅讓二

島袋寛太

新垣舞子(琉球舞踊の師範)

上原香奈

宮城凜

ユタ

【アメリカ軍】

ゲーリー・ブランソン中将(基地司令官)

マリーダ・ヘンデル中佐

チャールズ・スミス少佐

リネット・ブランケン

マイク・ウッズ(基地倉庫見張りの兵士)

トミー・ステモンズ(同)

【琉球独立党】

石川龍二

比嘉直哉

【その他】

木塚修身

村岡峰子(木塚の担当編集者)

山城(金城とは別グループの戦果アギヤー)

原田(同)

米軍基地——。

夜 12時<sup>11</sup>ころ。

フェンスの前を歩哨の兵隊が歩いている。  
「金城のグループの体当たり実行部隊の女、宮城凜がす  
り泣きながら走ってくる。」

後から、新垣舞子、上原香奈が追ってくる。

ちよつと離れて、チャールズ・スミス少佐がマイ  
ク・ウツズを従えてやつてくる。

凜 ねーねー、私、怖い。できないよ。(大声で泣き始める)。

舞子 甘ったれるな。ごはん、食べたいだろう？ 死にたくな  
いだらう？

凜 でもさ。でもさ——。

舞子は、凜をひっぱたく。

舞子 私たちを選べる道はないよ！ 生きるための最後の手  
段さ。

凜 (頷く)…………。

舞子 香奈も覚悟はできたね？

香奈 うー…………。

舞子 (スミスに) お待たせしました。

スミスと部下が近づく。

舞子 優しくしてあげて下さいね。

スミスはドル札を舞子に渡す。

スミス (凜と香奈に) くるんだ。

香奈 私、初めてなの。

マイク 来い。

香奈 ネーネー。

凜 ネーネー。

スミス 声が大きい。

舞子 そんな悲しい顔さんけー。

スミスとマイクは、フェンスの奥へ。

凜と香奈は、後から着いて行く。

舞子は、見送り、反対側に去っていく。

一同のやりとりを隠れて見ていた木塚修身が現れる。  
木塚はカメラを首に下げている。

木塚 ……ああ。人身売買だ。

立ち尽くしている木塚。

木塚 戦争に負けた厳しい現実が――。

そこに、木塚に基地内を案内する係の女性米兵、リネット・ブランケンがやってくる。

リネット 木塚さん！！ 木塚さん！

木塚 ああ。

リネット 困りますよ。基地内を勝手に動き回らないでくださいといったでしょう。

木塚 すいません、いろいろ珍しいものばかりだったんで、つい。

リネット いいですか、私から離れるのは危険ですよ、この基地には度々、戦果アギヤーと呼ばれる、基地内の物資を盗みにくる盗賊団がやってきます、兵士に、その一味だと思われるたら、即、銃で撃たれますよ。

木塚 はあ。

リネット 写真は撮っていませんよね？

木塚 ええ、もちろん。

リネット 撮りましたね？

木塚 はい。

リネット 無断で写真を撮るなどといったでしょう。

木塚 すいません。つい。

リネット 写真のネガは後でチェックさせてもらいますから。木塚 そんな、では、没収されてしまう写真もでてくるのですか？

リネット 当然です。

木塚 どうしても資料として使いたい写真が何枚かあるんですけど…。

リネット 木塚さん、あなたは、大学生ではあっても、一応は本土の大阪にある新聞社から派遣されたジャーナリストです。新聞社のジャーナリストが許可なく撮った写真を、無断で持ち帰らせる軍施設はありません。

木塚 はあ。

突然、基地内に、警報が鳴る。  
そして、遠くから機関銃の銃声がある。  
驚く木塚。

リネット 侵入者のようですね。  
木塚 あ、基地内に盗みに入るとい盗賊団でしょうか？

リネットは腰から拳銃を抜き出し――。

リネット おそらく戦果アギヤーでしょう。私たちは建物に戻りましょう。ジープをとってきます、木塚さんはここを動かさないで。

木塚 はい。

リネット すぐに戻ります。

リネットはその場を去る。  
リネットがいなくなってから、木塚は銃声がある方へ行ってしまふ。

誰もいなくなった場所に、盗賊集団、戦果アギヤーの、金城清真、喜屋武剛史、具志堅譲二、島袋寛太、ユタがリヤカーを引いて現れる。リーダーの金城を筆頭に、アギヤーたちは、各々の戦果である米軍の物資を、リヤカーに積み込み始める。  
リヤカーには、すでに巨大なものが乗っている。

金城 そっちの戦果は――？

寛太 機関銃が六丁に、銃弾が三ケース。

譲二 手榴弾が二十と六発――。

剛史 煙草三百ケースにバーボン二十ケース。

ユタ それにアテブリン五万錠――。

寛太 アテブリン？ なんだば、それ。

金城 マラリアの特効薬よ。アジア中の人間が、喉から手が出るほど欲しがっている。高く売れるぞ。

舞子が出てくる。

舞子 全部、積み終わったか。

金城 とう。

金城達はリヤカーを動かそうとする。

金城  
りか。  
剛史  
りかりか。

剛史リヤカーを後ろから押そうとする。  
だが、寛太が止める。

寛太 待つて！！

譲二 ぬうー！

寛太 わら半紙――。

譲二 はあ？

寛太 わら半紙、どっかに落とした。

剛史 そんなのはもういいさ。りかりか。

寛太 もうすぐなくなるってば。

譲二 あれだろう？ おまえが漫画を描く為の紙だろ？

寛太 やさ。

剛史 今度来たときにしれ、うりひゃー、アメ公くるよ。

寛太の腕を引っ張る剛史。

剛史の腕を払う寛太。

奥でわら半紙を探そうとする寛太。

譲二 タンメー、行こう。あれは置いていこう。

金城 ええー、寛太、はやく探せ。

寛太 (探して) あった。

寛太はわらばん紙を見つける。

寛太 あった。

舞子 はいく！

寛太は、みんなを追いかける。

そこに、木塚が現れる。

木塚に注目する金城たち。

譲二 なんか、お前？ お前もどつかのアギヤーか？

木塚 アギヤー？ いや、僕は本土の新聞社から派遣された新

聞記者です。米軍の基地を取材しているんです。

譲二 あいつ、内地の人間か。

金城たちをカメラで撮ろうとする木塚。

木塚 あなたたちは一体、なにをしているんですか？

譲二 みればわかるだろ、米軍の物資をかつぱらっているさ。

木塚 かつぱらい？ どうしてそんなことが——。米兵に殺されますよ。

金城 俺たちが米軍基地からものを盗む理由を知りたいか？

木塚 はい。

金城 生きるためさ。

木塚 生きるため？

金城 わっはっは——。

木塚 うわあ、面白い。

カメラで、アギヤーたちの写真を撮る。

譲二 お前、なにを無断で写真撮ってるば！

木塚 なんだか、いい被写体だなあとって。

寛太 ふらー。調子に乗らんけ。

寛太は、木塚のカメラを取り上げ、彼の頭を張る。

金城 うり、俺たちはずらかろう。

リヤカーを押し、米軍の敷地から出て行く金城たち。

呆然と金城たちを見送る木塚。

木塚 あんたたちただの泥棒じゃないですか。

寛太 かしまし、よけいなこというな。

呆然として、カメラが持っていかれたことに気が付く。

木塚 ああ！！ カメラ。あんたたち、やつぱり泥棒です。

木塚は金城たちを追う。

——暗転

米軍基地司令官室——。

朝八時ごろ。

ゲーリー・ブランソン中将がマリーダ・ヘンデル中佐に  
問いただしている。

横に、スミス少佐がいる。

ブランソン マリーダ・ヘンデル中佐、例のものが盗まれたという報告は確かか。

マリーダ 間違いありません。私が自分で確認してまいりました。

ブランソン ホワイトハウスに知れたら、大事（おおごと）になる。一刻も早く回収するんだ。

マリーダ はっ。

ブランソン くれぐれも取り乱すな。戦果アギヤーの手に余るものだ。速やかに回収すれば、何の問題もない。

マリーダ はっ。

マリーダは去る。

ブランソン スミス少佐。

スミス はっ。

ブランソン 沖縄をホワイトハウスが、日本の領土にすると思うか？

スミス 私にはなんとも――。

ブランソン 中国は蒋介石の国民党と毛沢東の共産党が内戦で、真つ二つに分かれている。朝鮮半島も三八度線を境に一触即発だ。アメリカには自由になる軍事基地が必要だ。この極東のどこかに。極東全体に睨みが効いて、独立した土地は沖縄をおいてほかにない。日本が独立し、植民地を脱した後も、アメリカは沖縄を返還することはない。

スミス すると、ブランソン司令官は、沖縄というアメリカの統括地のトップということになりますね。

ブランソン いらんことをいわんでいい。

――暗転

アギヤー部落――。

女たちは『五穀豊穰』を踊っている。

アギヤーたちは宴会を開いているのである。

金城がドラム缶一杯に入った札束を無造作に掴み、金を仲間に渡していく。

金城 うりっ、今回の取り分。今日の戦果もでかかったな。みんな好きなだけ呑めよ。

札束を受け取って、無造作にポケットにしまうアギヤーたち。

喜色満面である。

舞子 あんたたちも、ご苦労だったね。香奈、芝居うまくなったさ。

香奈 アメちゃん大満足だったよ。ジャパニーズ・ガール・ソ  
ー・スイート。五十回は言ってたよ。

舞子 凜は——？ アメちゃん、喜んだ？

凜 (笑いながら) チップ、こんなに貰ったさ。

舞子 上等。

凜 うり、ネーネー、もつと振り付け教えて。

舞子 うりひやあ。いいよ。

凜 さつきの続きやりたい。

金城 いいなあ。俺も乗るど。

男たち (口々に) わんも。

女たちは舞子の唄に合わせて、五穀豊穰を踊る。

男たちは、踊りの真似をしている。

舞子たちは舞踊を踊る。

金城たちが踊っている中、そこに、木塚が現れる。

木塚は呆然と、金城たちの踊りを見ている。

金城たちの踊りが終わる。

木塚に注目する金城たち。

譲二 これ、新聞記者——。

木塚 カメラ、返してください！

寛太 (笑う) カメラ取りにこの部落まできたのか？

金城 もうないさ。中国人に売ったよ。いつまでもあると思  
うな、親とカメラつてさ。内地には、そんなことわざないのか？

木塚 泥棒じゃないですか？

金城 これ、笑わすな。俺たちは、最初から泥棒よ。今さら言  
われてもなあ。

加奈 タンメー。誰ねえ、この人？

金城 分かん。自称・新聞記者。

剛史 はいさい、新聞記者様。

木塚 (びくついて) はい。

剛史 めんそーれ。飯、食べていけ。

木塚 (おびえて) 別のカメラでもいいから、返してもらいま  
いで許しませんよ。

寛太 そんなに怖がらんくてもいいさあ。俺たちはそんなに悪  
い奴じゃないよ。

木塚 自分が悪い奴じゃない、という人は大体悪い人です。

寛太 これ、大人の世界がよくわかってるな。

剛史は木塚の肩に腕を回し、強引に、木塚を宴会のテーブルに座らせる。

剛史 食べれ。  
木塚 どうも。

木塚はテーブルに並ぶ、食糧を見て、

木塚 うわ、すごいな。

寛太 (笑う) だっからよ。

木塚 どうやって手に入れたんです？ これを？

剛史 米軍基地から、奪ったものを売った金で、手に入れたさ。

木塚 それって、泥棒ですよ。

香奈 余計なこと言わなくていい。

剛史 アメリカ軍の物資は、マーケットで飛ぶように売れるぞ。

譲二 マーケットにはアジア中から商人が集まってくるさ。

寛太 俺たちも船を飛ばして、アジア中に売りさばく。

木塚 あなたたちはアメリカ軍から奪った物資を、売って暮らしているんですか？

剛史 潤うのは、俺たちだけあらんど。奄美の人間も、石垣の人間もみんなさ。金があるとこから頂いて、ない所に配る。

義賊だと思えばいい。現代の石川五右衛門さ。(笑う) わかったか。わかったら食べれ。

木塚 それで、彼女たちは？

寛太 彼女っていう感じでもないけどな――。

舞子 私たちは、体当たり部隊さ。

木塚 体当たり部隊？

舞子 この娘たちが、見張りの兵士を誘惑している間に、男たちが、物資を奪っていくわけ。

木塚 じゃあ、あのとときは芝居ですか――。

香奈 昨日の夜のこと、見てたんだ。――そうよ、商売さ。

凛 そんなことで、びっくりしていたの？ うぶだね。

香奈 可愛い。

木塚 (凛に) あのととき、大粒の涙、流してましたよね。

凛 あれね、わじやと。……少し嫌がる振りしたほうが、ア

ちゃんも喜ぶし。

香奈 私、初めてなの、っていうと喜ぶのは、日本人もアメリ

カ人も同じさ。

木塚 じゃあ、嘘ついていたんですよね。

香奈 嘘じゃないさ。男が喜ぶことを言ってあげるのが、女の真実よ。わかった？

木塚 わかりたくないかも。

剛史 うり、食べれ。(食べ物をお口にを入れる)

突然食べ物を口に入れられる木塚。

寛太 だあ？ 内地じゃあ、食べられないものばかりだろう。

木塚が食べるところを、全員がじっと見る。

木塚 なにか、味わう余裕がありません。

一同笑い。

突然、米軍のゲーリー・ブランソン中将が、マリィダ、スミス以下数名の兵士たちを引き連れやってくる。

ブランソン 動くなーっ！！

「動くな」といわれて、アギヤーたちは、一瞬止まるが、反抗して食べ続ける。

木塚も真似して、食べ続ける。

マリィダは、食卓を機関銃の柄で叩く。

木塚 うわっ！

マリィダ 反抗的な態度はやめろ！

木塚 やっぱり、怒られますよね。

マリィダ 当然だ。

寛太 (木塚に)なんくるないさ。形だけのガサよ。あれたちすぐには帰っていきさ。それにあれたちから奪った物はおつくに売っぱらったから、ここにはねーらん。

マリィダ 整列。

ブランソンの前に並ぶ部下の兵士たち。

ブランソンが部下に命令する。

ブランソン 犯人はこいつらだ。周辺を隈なく捜せ！！

ブランソンの号令により、一斉に動く兵士たち。

兵士たちは部落内を荒らしていく。

金城たちは黙ってその様子を見ている。

金城　でーじ、荒いな。

ブランソン　お前がこのアギヤー部落の頭目、金城清真か——。

金城　だーるよ。

ブランソン　お前、真人間になつたらどうだ。

金城　真人間？

ブランソン　まともな人間は生活の糧を得るために、額に汗して働くものだ。人のものを盗むのが誤った行いであることは、太古の昔から決まっている。

金城　だったら、何で俺たちが盗むか教えてあげるよ。俺たちの目的は、米軍をウチナーから、追い払うことさ。

ブランソン　何だと——？

金城　アメリカと戦争をやって負けたのは、内地のやつら。俺たちウチナーンチュウじゃない。俺たちは、アメリカに無条件降伏なんかしてないぞ。内地のツケを、ウチナーンチュウが払わされたら、間尺に合わない。だからよ、お引き取りいただきたいというのが、俺たちの切なる願いさ。

ブランソン　沖縄は日本の一部だ。

金城　アメリカ政府と日本政府はそう思っているかもしれないけど、俺たちウチナーンチュウはそう思っていないな。

ブランソン　お前のような屁理屈をいう人間は、世界中にいたとえばアイルランドの連中は、自分をイギリス人ではないと言いつけている。同じだ。

舞子　だったら、タンメーのいうことは、当たり前のことさあねえ。(女たちに)　ねえ。

香奈　だからよねえ。

凜　だからよねえ。

ブランソンは、銃の柄を金城の顔の前に出し、威嚇する。

金城　あんたたちには、俺たち戦果アギヤーが頭痛の種さ。極東の平和を守るために、本国から送られてくる物資が煙のように消えてなくなってしまうからな。こんなに割りに合わない基地はない。だったら、いつそ、米軍は別の場所に移るのが利口な考えやさ、と、そう決断させるのが狙いよ。

舞子　わかったか？ 私たちは、ウチナーを米軍から取り戻す正義の戦いをやっているわけ。

ブランソン　正義の戦い——？ (高笑い) お前たちは泥棒を正当化するのか。盗人猛々しいとはよくいったものだ。よく覚えておけ。自分の間違いを強引に正当化することを詭弁という。お前たちの、論法は全て詭弁だ。

金城 俺は、難しい言葉、頭に入らんタチだけだよ、よく覚えとくさ。

スミスがブランソンの元に駆けつける。

スミス ブランソン司令官、部落の外には見当たりませんでした。

ブランソン そうか。……うまく隠したようだな。

金城 なにがよ？

ブランソン とぼけるな、おまえたちが基地から奪ったことはわかっている。

金城 何をよ？

ブランソン とぼけ通す気だな？ 大した度胸だ。

金城 いっぺえにふえでーびる。

ブランソン その度胸に免じて、一度だけ猶予をやるう。

金城 猶予——。

剛史 でーじ偉そうだな。

ブランソン 我々米軍に返すんだ。今返せば、おまえ達一派を悪いようにはしない。もし、今、返さないで、我々の手で、みつけたときは、おまえ達に対して容赦はしない。

金城 皆殺しにするば——。

ブランソン さあ。私は合理主義者だ。時間の無駄が嫌いだ。いいか、私からの質問は一度だけ。おまえの答えは十秒以内だ。

金城 ——。

ブランソン 盗んだものはどこにある？

金城は懐からタバコを取り出し、タバコを吸う。

ブランソン ——。

金城は、タバコを揉み消す。

金城 もうねえらん。

ブランソン なんだと。

金城 これが最後の一本さ。

ブランソン 何？

金城 これで、あんたたちの倉庫から失敬した洋モクはここにはねえらん。

寛太 あぎじやびよー！ タンメー、これたちが言ってたモノって、タバコのことだったば！

剛史 タバコくらいで、でーじ大げさだなあ！

マリーダ 下らん芝居をはやめろ。

剛史 威勢がいいね。このネーネー。

マリーダ 口を慎みなさい。

寛太 うとうるさぬ——。

ブランソン まあいい。いいことを教えてやろう。この辺一帯は、軍の新しい滑走路の建設予定地だ。この部落も一週間後にはブルドーザーが入り、真つ平らになる。滑走路の周りにはフェンスで囲い、日本人は入れなくなる。

剛史 そんな勝手なことさせるか。ここは俺たちの土地ど。

舞子 このへんは、大昔からうちの土地なんだよ。

香奈 だっからよ。

凜 だからよ。

ブランソン 一九四五年のポツダム宣言を忘れたか。ここはアメリカの統治下にある土地だ。ここに滑走路を造ることは、日本政府も認めている。

金城 日本政府が認めても、俺たちが認めん。

ブランソン せいぜい、ほざけ。お前たちが、例の物を出さんと言っても、ブルドーザーで地ならしをしているうちに、やがては見つかる。

金城 ふざけんけ。(掴みかかろうとする)

男たち (止めて) タンメー。

ブランソン タンメー——。タンメーとはどういう意味だ。

譲二 ウチナーぐちで、長老のことさ。

ブランソン 長老——。随分、若いな。

剛史 歳じゃないど。度胸のことよ。

ブランソン では、アギヤーとは——。

剛史 ウチナーの漁の方法さ。俺たちは、漁をする時、荒波の中、人間が海に飛び込んで、魚を網に追い込む。魚という命の糧を得るために、自分の命を賭けて働く。それがアギヤーさ。

ブランソン それが盗賊団という意味に転化したということか。考えが古い——。その古い考えを全て変えてやろう。それが私の仕事だ。

ブランソンと部下達は去っていく。

米軍が去った後、金城と別グループのアギヤーたち、山城と原田が様子を伺いながら、入ってくる。

山城 タンメー、何をした？ さつき来たのは軍の基地司令官だろ？

金城 正解よ。

山城 なじえ、基地の司令官がわざわざ、こんな部落にガサ入れにくるば？

原田 変じゃないか。またやつけーなことを起こすんじゃないか。

突然、テーブルを引っくり返す金城。

テーブルの下から巨大な爆弾が出てくる。

金城 これさ、やつらの目当ては。

山城・原田 これは！！

木塚 うわっ！！

舞子 タンメー、これは？

金城 一トン爆弾よ！ アギヤーに入った時、たまたま目に入ったから、もらってきたさ。

山城 なんでこんなものを。

金城 米軍との喧嘩に使うのよ。

山城 米軍と――。

原田 喧嘩――？

金城 ブランソンが言っていたように、あれたちはこの部落に滑走路を建設するつもりさ、おれたちをここから立ち退かしてよ。その立ち退き要求を、この爆弾を使って撥ねつけてやろう。

山城 あいえなー！？

爆弾の上に立つ金城。

四方に散る山城たち。

原田 やめれ！！

金城は爆弾の上に立ったまま。

金城 東西南北、四方の海を見渡せるこの土地は、おれたちアギヤーの聖地よ。俺たちはウミンチュさ。先祖は、海の遙か彼方ニライカナイからやってきた。海風が俺たちの生きる源よ。あれたちの都合で立ち退いてたまるか。アメリカの要求を撥ねつけたら、おれには考えていることがある。

舞子 いいから降りれ！

金城も、落ち着いて降りる。

金城 この土地で、エイサー祭りを開く、おれたちウチナンチユウの魂であるエイサー祭りを。

山城 お前は、この土地で祭りをする為に、爆弾を盗んだって  
いうば？

金城 そうよ。おれは我慢ならない。敗戦から二年。負け犬の眼をしたままのウチナンチユウたちの姿が。内地の顔色を伺い、アメリカに媚びへつらう。俺たちに必要なのは、ウチナンチユウの誇りさ。自信さ。ウチナンチユウの誇りであるエイサー祭りが復活したら、少しは誇りが戻ってくる。だから、俺はこの爆弾で、アメ公を脅して、立ち退きを突っぱねる。この部落に島中のウチナンチユウを集めて、エイサー祭りをやろう。

山城 タンメー、それはじえつたい無理よ！

原田 一週間後には、滑走路の工事ははじまつてるさ。

山城 これはただでは済まない。アギヤーが、やっていることはアメリカ軍へのし返しではあっても、それも所詮うさ張らし。いくらアメリカ軍の物資を掠め取るうが、向こうにしたら、痛くも痒くもないさ。だから、今まで、アメリカのお目こぼしを受けてこられたんだよ。

原田 そんなものを盗んだら、あれたちも本気になるに決まっているさ、俺たちを本気で潰しにくる。もうアギヤーとしてやっていけなくなるぞ。

山城 タンメー、そんな爆弾はいく返そう。そしてこの部落から立ち退いたほうがいい、住む場所ならいくらでもあるさ。

金城 あい？ おまえたち、祭りだよ。祭りやりたくないのか？

山城 そんな爆弾を盗んで、アメリカカーを、敵に回しておいて、祭りなんかできるか。

金城 六年振りの祭りよ。

山城 アメリカカーに勝てないってば。長いものには巻かれよう。俺たちはアギヤーやっつて、楽しく食べていければそれでいいって。

金城 いいん、やる。

山城 そんな馬鹿げたことを考えている、アギヤーはあんただけってば。

舞子 ここにもいるよ。

アギヤーの一同、「ここにもいんどお」と異口同音に告げる。

山城 もういい、勝手にしれ。  
原田 しれしれ。けどよ、俺たちを巻き込むなよ。  
山城 とぼっちりを食うのはご免だからな。

去っていく山城たち。  
金城は山城たちの背中に叫ぶ。

金城 一週間後よ！ 祭りは！！ ちゃんとエイサーの稽古  
しとけよ！！

譲二 いやささ。  
一同 はいや。

山城たちに紛れて木塚も去っていくこうとする。  
木塚を捕まえる剛史。

剛史 えー、待て。

木塚 はい？

剛史 どこにいくつもりか？

木塚 基地に戻ります。取材が残ってますんで。

剛史 だめさ。

木塚 駄目って？

譲二 おまえ、おれたちの話聞いたよな。

木塚 僕はいただけです。

譲二 やしが聞いたよな。その人間を基地に帰すわけにはい  
かない。

木塚 待つてくださいよ。

譲二 (笑う) カメラも取り戻してないさ。カメラ取り戻した  
ら、帰ってもいいぜ。

木塚 そんな。

一同 笑い。

——暗転

米軍基地・ブランソン司令官の執務室——。  
昼ごろ。

ブランソンが椅子に座っている。

マリーダ・ヘンデル中佐が部屋に入ってくる。

マリーダ マリィダ・ヘンデル中佐、入ります。

ブランソンの前に立つマリィダ。  
ブランソンはマリィダのことをじっと見ている。

ブランソン ……ヘンデル中佐、いい目をしているな。君の目には迷いが無い。

マリィダ 光栄です。

ブランソン 君に任務を与える。

マリィダ はっ。(敬礼)

ブランソン アギヤー部落の監視を行ってもらいたい。例のものはず彼らを持つている。もし、彼らがおかしな動きをしたら、やつらを、拘束し基地に連行せよ。特にあのチンピラたちのリーダー、金城清真、通称・タンメーをマークしろ。マリィダ はっ。

ブランソンはテーブルの上に、拳銃を置き、ウイंकをする。

ブランソン 金城を拘束するためには、どんな手段を使ってもかまわない、君に憎き沖繩の人間どもに復讐する機会を与える。

マリィダ ありがとうございます。私の婚約者は、沖繩戦で捕虜になり、なぶり殺しにされました。軍事協定も通用しない連中です。沖繩を民主化するまで、私の戦争が終わることはありません。

テーブルの上の拳銃をとるマリィダ。

ブランソン しつかりやってくれ。

マリィダ はっ(敬礼)。

——暗転

アギヤー部落——。

昼下がりに——。

金城たちが爆弾を取り囲んで坐っている。

一同は、悩んでいるのである。

寛太 うーん。

譲二 考えてなかったな。この爆弾をどうやって使うか。

金城 だとこ勝負だからな、おれたち。(笑う)

一同 (金城を見る)——。



剛史 祭りが終わるまでの辛抱さ。人生にそういうことはいくらでもある。

金城 悩んでたつてしようがない。まあ呑め。

舞子 そうよ。

よし。とばかりに一同、呑み始める。

女たちは、コップ酒を手に、唄い踊る。

寛太は、紙に絵を描いている。

それを覗き込む木塚。

寛太は、一冊の本を木塚に見せる。

寛太 これ読んで、気分直せ。

木塚 これは――。

寛太 『冒険宝島』という赤本漫画さ。今、内地の子供にでーじ流行ってる。

木塚 あの――。

寛太 (構わず)見れ。何ページも台詞がない。車が格好良く、疾走する場面が続く。画期的な漫画ど。ページを見ているだけで、まるで映画を見ているような錯覚に陥る。新しい時代の漫画さ。漫画の未来が、一冊に詰まってる。俺はこういう漫画を描く漫画家になりたいってば。

木塚 実は――。この漫画の著者、木塚修身って、僕なんです。

寛太 ゆくしつ、嘘だろう！

木塚 嘘じゃありません。

寛太 証拠を見せれ。

木塚は、寛太の持っている紙に、サラサラと絵を描く。

『冒険宝島』の主人公の顔だった。

寛太 俺、夢見ているみたいだ。

木塚 僕はこれを描いたあと、スランプに陥って、第二作目が描けないんです。僕は大阪大空襲でたくさんの方が死ぬのを目の当たりにしました。漫画で「生きる」というテーマを追い求めたいんです。新作の構想を練るために、新聞社の人を呼び倒して、今回の沖縄取材の機会を得たのです。激しい地上戦のあった沖縄に来てみればヒントがつかめるかと思ひまして。

寛太 沖縄に、ネタあったのか？

木塚 いいえ――。でも、僕は毎日びっくりしています。

寛太 びっくり――。

木塚は絵を描きながら、話している。

木塚 僕は、ビックリが大好きなんです。人をビックリさせた  
いんです。

寛太 俺はこの『冒険宝島』を読んだ時、びっくりしたよ。こ  
んな奇抜な漫画がこの世にあったのかつてき。

木塚 ところが、僕は、いまでもしてもビックリが思いつかな  
い。

寛太 びっくりか——。子供がびっくりするような漫画が描け  
たら、俺も漫画家になれるか？

木塚 なれます。

寛太 (木塚の絵を見て) これはなんだば？

木塚 宝塚大劇場です。宝塚歌劇団の劇場です。うちの近くに  
あります。僕、一回見たものは、何でも絵に描けるんです。

寛太 しかまず。俺は今、びっくりだよ。

金城 お前、見かけによらず、いいところあるな。

木塚 人を見かけで判断しないでください。

金城 この爆弾の使い道、何かないか？

譲二 米軍がぶったまげるような爆弾の使い道ど——！

木塚 いや、僕はこの土地には不慣れだし、沖繩のことも、基  
地についても知らないことばかりです。……もつと、基地の  
人間や沖繩に詳しくて、頭のいい人に、相談したほうがいい  
んじゃないでしょうか？

金城 ……頭のいい人か……、そうだな……。

寛太 タンメー、思い当たる人、いるのか？

金城 いい。俺の尋常小学校の代用教員だった石川先生よ。中  
学しか出てないけど、内地の大学出えより、頭が切れよった。  
俺の周りで頭のいい人といったら、石川先生しかないな。

金城は歩いて行く。

ユタは、盆の上の米粒を動かして占いをしている。

舞子 (ユタに) ユタ。タンメーの思いつきは、大丈夫ね？

木塚 この人、占い師なんですか？

舞子 ウチナーチュウは、吉凶をユタに占って貰うさ。

ユタ 出た。米粒が右に、七粒。左に八粒——。大吉よ。

舞子 そう。だったら、呑むか。

アギヤー達、唄い、踊りながら。

——暗転

浜辺——。

昼下がり。

石川が比嘉と琉球空手の型を練習している。

石川は、紅型の鉢巻をいつも巻いている。

そこに金城がやってくる。

後ろから、木塚が追ってくる。

金城 ついてこんけー。言ってるだろう。

木塚 お願いします。漫画のネタを拾いたいんです。

金城 邪魔。けーれ。

木塚 帰りません。引くわけにはいきません。

金城 勝手にしれ。

石川が声をかける。

石川

金城。

金城 石川さん。こんにちは。

笑顔でお互いに、近づく二人。

突然、石川が笑顔のまま金城の顔に、突きを入れる。

金城は石川の突きを、腕で払う。

木塚 なんですか!?

空手の組み打ちをする二人——。

金城と石川は笑いあう。

金城 石川さん、腕、あげましたね。

石川 やしが、お前には歯が立たん。

木塚 すげえ。挨拶がいきなり空手かよ!?

金城 木塚、この人は石川龍二さん。琉球独立党の党首さ。党

の目的は、琉球政府の独立よ。(木塚を示し) これは、アギ

ヤー部落の居候で、木塚です。

石川 石川です。ゆたさるぐとうー、うにげーさびら。(比嘉

を示し) ここにいるのは、比嘉直哉君。琉球独立党の、俺の

右腕。比嘉は内地の大学で、法律を勉強してきた男よ。

比嘉 比嘉です。よろしくお願いします。

木塚 こちらこそ。

石川 (比嘉に) 金城は俺が小学校の代用教員をしていた時の  
教え子さ。悪ガキだったけど、とにかく腹が座っていた。実

は俺たちは兵隊にとられた時、戦地でたまたま同じ部隊に配属されよった。俺は、金城に何度命を助けられたかわからんよ。(笑い)

金城 俺は恩人に当然のことをやったまです。

石川 して、金城、今日は何の用か？

金城 実はですね——。

そのとき、マリイダ率いる米兵たちが現われる。

マリイダ 手を挙げる！ 身体を動かすな。少しでも動いたら、命はないぞ。

木塚 ちよつと！！

金城 取り囲まれたか——。

金城たちは銃を持った米兵たちに取り囲まれる。

そのとき、兵士たちの背後から剛史、譲二、寛太が現われる。

兵士たちを倒していく剛史たち。

木塚 彼らは……。

金城 こんなときの為に、あれたちに張らせてたさ。

次々に兵士たちを倒していく剛史たち。

マリイダは、金城に銃を向ける。

石川がマリイダの銃を蹴りあげる。

マリイダ この——！

金城はマリイダの銃をキャッチする。

そして、マリイダに銃を向ける。

マリイダ 殺せ——！

石川 その言葉をそんなに安っぽく使うな。ヌチドウ、タカラさ。

金城 たった一つしかない命は、もつともつとでーじなところで使え。

金城は、銃をマリイダに返す。

去っていく金城たち。

マリイダ 何故、私を殺さない——。何故——。何故——。

金城が捨てた銃を拾うマリイダ。  
金城、石川たちは、歩き始める。

比嘉 彼女に銃を返して大丈夫ですか？  
金城 もともとあの女の銃さ。  
剛史 とつたら、俺たちは泥棒ってことになる。  
石川 最初から戦果アギヤーなのにか？

一同笑い。

金城 石川さん。見てもらいたいものがあるんですけど。  
石川 なんねえ。  
金城 ちよつとついてきてもらえますか。  
石川 やさ。

——暗転

鍾乳道——。

金城、石川たちが歩いている。  
寛太が木塚に話しかける。

寛太 このガマは——。  
木塚 ガマ？  
寛太 ああ、鍾乳洞よ。戦争のとき、防空壕だったってば。  
木塚 へえ。

金城が爆弾を指差し——。

金城 石川さん、これが、例の爆弾。  
石川 あきさみよー、これは。  
金城 どうです。でっかいでしょう。一トン爆弾よ。  
石川 おまえたち解っているのか？  
金城 なにがよ？  
石川 原子爆弾じゃないか、これは。  
木塚 原爆！！  
比嘉 間違いありません。原子爆弾です。  
金城 はっ！？  
剛史 ゆくしつ。  
寛太 あぎじえ。  
譲二 ひんぎよう——。

比嘉 見て下さい。信管の形が火薬の爆弾とはじえんじえん違  
います。大戦末期に使われた物を小型化した改良型です。

逃げようとする木塚。

木塚 ——。

木塚を掴まえる剛史。

剛史 待て。

木塚 だって！！

寛太 なじえ、米軍基地に、原爆なんか。

比嘉 沖縄がいくらアメリカの領土になったといっても、原爆  
を日本に、持ち込むとは思えない。

石川 いーいん、あっても不思議はない。

寛太 なんでよ？

石川 日本の戦争を終え、アメリカの次の相手は、ソ連、中  
国などの共産主義国よ。いつ戦争が始まってもおかしくはな  
い。アメリカにとって沖縄は、共産主義国の防波堤さ。

比嘉 だからって、こんなものを——。

石川 やしが、金城、これは使えるな。

金城 (笑い) だーる、そうでしょう。俺は、第六勘で、絶対  
に使えると踏んでた。

石川 もし、アメリカが沖縄に、原爆を持ち込んだことがおお  
やけになれば、国際問題に発展する。共産圏との関係だけで  
なく、日本との講和条約もこじれることになる。アメリカに  
とって大打撃さ。おまえ達の部落に対する立ち退き要求も突  
っぱねられるし、うまくいけば、沖縄からアメリカ軍を一掃  
することもできる。

寛太 どうやるば？

石川 米軍と戦をする。

譲二 ……戦？

石川 交渉という名の戦さ。

比嘉 石川さん。

石川 やしが、これは際どい戦になるど。

寛太 際どいって？

石川 命がけの戦になる。

金城 だーるね——。

比嘉 石川さん、たったこれだけの人数で、米軍と戦うことは  
不可能です。しえめて日米交渉での沖縄の位置づけが決まる  
まで、時期を待ちましょう。

石川　いーいん、鉄は熱いうちに打て、さ。  
金城　いいば？　おまえたち。

剛史　俺たちはみんな、先の戦争で死んでいたはずのものばかりよ。たまたまタンメーに助けて貰って、奇跡のように生き永らえている。もともとおまけのような人生さ。どうなるかと、とつくに覚悟のできているものばかり。(男たちに)　だーるよな。

寛太　だーるだーる。

譲二　俺もさ。

金城　だー、決まった。内地はアメリカに白旗を挙げたけどよ、ウチナーは挙げてない。宣戦布告ど。

石川　(笑う)　変わらん、おまえは。

金城　うり、米軍との交渉は石川さんたちに任せて、おれたちは祭りさ！　エイサーの準備にとりかかろう！  
譲二　いやささ、はいや。いやささ、はいや。

——暗転

米軍基地・ブランソン司令官の執務室——。

夕方——。

マリーダがいる。ブランソンが入ってくる。

マリーダ　申し訳ありません。

ブランソンは椅子を蹴る。

ブランソン　金城の拘束に失敗したのか！

マリーダ　はい——。

ブランソン　俺を失望させるな。マリーダ。

マリーダ　弁解の余地ありません。

ブランソン　報告では、貴様、金城を撃つチャンスがありながら、撃たなかったということだ。

マリーダ　はい——。

ブランソン　どうしたんだ。沖縄の人間はお前にとって憎むべき敵だ。違うか。戦争で、婚約者が沖縄の部隊に殺された。それもただ銃弾に倒れたのではない。捕虜となって、なぶり殺しにされたのだ。捕虜の遇し方を取り決めた戦時協定など、奴らには通用するべくもない。君から何度も聞かされた言葉だ。彼らの頭の中は、まだ前近代のまま。何を躊躇することがある。

マリーダ　そうでした——。

ブランソン 憎しみをどこに落してきたのだ！！  
マリーダ いえ。

テーブルを叩くブランソン。

ブランソン まったく！！ 能無しの部下を持つと苦労ばかり増える！！

そこに、チャールズ・スミス少佐が入ってくる。

スミス チャールズ・スミス少佐、入ります。

ブランソン なんだ！！

スミス はっ。司令官に面会を求めている人物がおります。

ブランソン ……面会？ 誰だ！？

スミス 琉球独立党の党首、石川龍二。それに彼の側近の比嘉直哉です。

ブランソン 追い返せ！！ どうせ、又、不良兵士の素行を抗議しにきたんだろう。

スミス いえ、石川たちは、戦果アギヤーによってこの基地から盗まれたあるものについて、話をしたいと言っています…。

ブランソン なに？ 通せ——。

石川が米兵の腕をねじあげ入ってくる。  
後ろから、比嘉が着いてくる。

石川 もう、通らせて貰ったよ。客に対するマナーを教育し直した方がいいな。

石川は、米兵の腕を離す。

ブランソン 座れ——。

石川とブランソンはテーブルに向かい合って座る。  
ブランソンの後ろには、マリーダ、スミスが立っている。

石川 金城清真は、私の小学校教員時代の教え子でしてね。今でも私を慕ってくれています。

ブランソン 素晴らしい。ごろつきの金城と石川さんが旧知の仲だったとは——。あなたは極東の平和に、多大なる貢献をしたことになる。あれは、共産圏から極東を守る盾なのだ。

立ち上がり、ブランソンは石川に握手を求めろが石川はその手を握らない。

ブランソン (手を引つ込めて)それで、やつらは例のものをどこに隠したんだ？

石川 例のもの——？ はっきりいいますよ。原子爆弾とね。

ブランソン …… (苦笑い)。

石川 原爆を渡すには、たーち条件がある。

ブランソン 取り引きか？

石川 やさ。

ブランソン 石川さん、あなたは他の沖繩人と違って、回りくどいところがない。(笑い) いいだろう。二つの要求というのは？

石川 ていーち、来年までに沖繩からアメリカ軍を完全撤退させる。たーち、軍の滑走路予定地である地元住民の部落に手を出さない。

比嘉 石川さん——！ (言い過ぎを止めようとする)

ブランソン 俺は耳が悪くなったのかな——。

石川 もういつぺん言いましたよ。

ブランソン 不要だ。大胆な要求だな。

石川 要求を受け入れてもらえないようなら、原爆を引き渡すことはできませんね。

ブランソン お前は命が惜しくないのか？

石川 基地の最高責任者であるあなたの一存でも、すぐに決定できることではないでしょう。猶予を与えましょうね。ただし、期限は三日。それ以上延ばすと、エイサー祭りに支障が出る。

ブランソン お前たちが持っているも、何の役にも立たん原子爆弾だ。始末に困っているくせに、それで取引をしようなどとんでもない悪党だな。

石川 したら、米軍基地で原子爆弾が盗まれたことを全世界に知らせていいんだな。

石川は立ち上がる。

比嘉 石川さん——。

ブランソン やれるものなら、やってみろ。我々は痛くも痒くもない。

石川 日本は世界でただ一つの被爆国さ。米軍が核兵器を持ち

込んでいることを知れば、日本政府は対米政策を一気に硬化させる。昨年公布したばかりの平和憲法である日本国憲法が空手形だと知れ渡る。植民地根性を捨て、米国に牙を向くことになるはずよ。ソ連にしても、戦勝国の手柄をアメリカに独り占めされて、怒り心頭に発している。アメリカが原子爆弾を隠し持っていることを知ってみ。北方領土だけでなく、内地に攻め込んでこないとも限らない。中国では内戦が続いている。朝鮮半島では北と南が睨み合って一触即発の状態。極東ではいくら武器があっても多すぎるといふことはない。戦果アギヤーが基地から盗む兵器が飛ぶように売れるのはこういうわけさ。——原子爆弾を、セリにかけてみるか。いくら出してもいいから欲しい、という人間は極東にはいくらでもいるよ。

ブランソン お前、それでも政治家か——。

石川 恐喝まがい、といたいのか。やしが、世界で最も恐喝のうまいのは、アメリカの政治家よ。

石川はブランソンの手を取り、強引に握手する。

石川 早急に、ご検討頂きたい。

ブランソン ——。

ブランソンは石川の手を払い、

ブランソン 我々を怒らせることになるのは、わかっているな。  
石川 感情を自分でコントロールできない人間は、まだ十分に理性が身に着いていないということさ。

ブランソン 何故そんな愚かな行動に出る。

石川 金城は勉強のできない男でした。取り柄は腕っぷしが強い、腹が据わっている。このたーちだけ。ある時、私の受け持ちの教室で喧嘩が起きました。奄美大島出身の二人を、沖繩の子供四十人がいじめ、火が付いた。一対四十の喧嘩です。結果は火を見るより明らか。金城は沖繩の子なのに、奄美の側に立ち、先頭に立って、沖繩の子と戦った。勝ち負けは二の次さ。強気を挫き、弱気を助ける。男はこうありたいね。私が、現場に付いたときには、金城は血だらけになり、たった一人で、四十人の沖繩の仲間をやっつけていた。私は教え子に大切なことを教わったさ。金城にはもうていーち、美点があります。祭り好きだということ。ふりむん、大馬鹿野郎と言いたいほどの祭り好きです。

ブランソン ——。

石川 その男に、久しぶりに会いました。したら、私も馬鹿なことを大真面目にやってみたくなりましてね。

去っていく石川、比嘉――。

ブランソン 日本がアメリカに無条件降伏をしたことを、まだわかっていないようだな。

スミス ふざけたマネを――。

ブランソン スミス少佐。

スミス はっ。

ブランソン ただちに、琉球独立党の情報を集められるだけ集めろ。

スミス はっ。やつらの弱味になる情報ですね。

ブランソン そうだ。やつらを懐柔する為には手段を選ばな。

スミス はっ。至急とりかかります。

スミスは部屋を出て行く。

マリイダ わたしは何をすれば――。

ブランソン しばらく頭を冷やしている。

次にブランソンが出て行く。

マリイダは、ブランソンに無視されて、悔しさをかみしめている。

――暗転

アギヤー部落――。

朝――。

賑やかに祭りの準備を進めているアギヤーたち。

シーサーの張りぼてをつくったり、櫓を作ったり。

女たちは、衣装を縫っている。

木塚がやってくる。

木塚 ご飯の用意、できました。

譲二 おう、そうか。えー、メシど、メシ。

準備の作業を止めない一同。

譲二 だー、あとから、あとから。

頷く一同。

讓二 (笑う) だろう。

木塚 はい。

木塚は、お盆に載せた食べ物を食卓に置く。

剛史 食べよう。

木塚 いいんですか？

剛史 俺は食べたい。

木塚と剛史は握り飯を頬張る。

木塚 自由だなー……。不思議です。

剛史 何がよ？

木塚 どうして、生きることがそんなに楽しいのか。

剛史 楽しい？ 考えたこともないな。

木塚 僕は、太平洋戦争の犠牲になった悲劇の島・沖縄を取材にきました。有名なひめゆり部隊などをね。ところがアギヤー部落は、本土で報道されている沖縄とは全く違う。ビックリの連続です。——生きるということとは、とてもダイナミックで、心が躍動するようなことです。

剛史 おまえも、このままアギヤーになればいいさ。

木塚 いや、ぼくにはとても。

木塚は周りを見て——。

木塚 タンメーは？

剛史 石川さんのところにいつてる。

木塚 どうして、あなたたちは金城さんについていくんですか？

讓二が握り飯を取りにくる。

讓二 タンメーは俺を対等に扱ってくれたさ。

木塚 対等？

讓二 俺は奄美大島の出身よ。奄美の人間は、沖縄本島の人間に差別されるさ。戦争中、現地召集のウチナーンチュウは、本土の兵隊の弾よけに使われよった。ウチナーンチュウが差別されたことは知られているけど、ウチナーンチュウしかない部隊では、奄美の人間が見下されることは知らんだろう。

戦地で、タンメーは俺をウチナンチュウと対等に扱ったさ。  
寛太 おれもガキの頃から、絵を描くくらいしか取り得がなかつた。馬鹿にされ続けてきたけどよ、タンメーだけは、一人前に扱ってくれる。

舞子 みんな行き場のない人間さ。私も戦争で、亭主と子供を亡くした。タンメーに、この部落、生きる場所を与えられたんだよ。

木塚 生きる場所――。

香奈 タンメーには、命の垣根がないってば。

木塚 垣根？

香奈 自分の命と人の命の間に垣根がないわけ。自分の命を扱うように人の命を扱うさ。

寛太 本当にそうよ。タンメーは偉い。

木塚 自分のことしか考えていない僕って、せこいですよね。ここにいと、自分の悩みが、どうでもいいことのように思えてきます。

寛太 ――悩みか？ 考えたこともないな。

剛史 働く。食べる。寝る。働く。食べる。寝る。そして、寿命が来たら死ぬ。それが生きるってことじゃないか？

木塚 悩みなんか、入る隙間がないですね。(笑う)

一同、笑い。

――暗転

琉球独立党・事務所――。

午前中――。

石川と金城がいる。

石川 原爆の威力は想像以上にでかい。あれたち、でーじビビっている。

金城 (笑う) そうか。石川さん、あなたがいれば百人力さ。

石川 おまえは祭りを盛り上げれよ。

金城 まかちよーけー。

石川 成功させないとな。この祭りはなんとしてでも。

金城 だーるね――。

立ち上がり、部屋を出て行くこうとする金城。

そこに、比嘉直哉が入ってくる。

比嘉 失礼します。

石川 おー比嘉！いったことがあったかな。比嘉は内地の大学で法律を勉強してきた男さ。これからのウチナーには、必ずこの男が必要になる。

金城 何回も聞きましたよ。石川さんは比嘉さんを人に紹介するときは、嬉しくって仕様がないうって顔してる。

比嘉は黙礼――。

金城 あい、なんか石川さんに似てるね。（笑う）歩き方もそっくりさ。

比嘉 （笑う）――。

比嘉の肩を叩き、去っていく金城。

金城 またや。

比嘉は金城に叩かれた肩を払い、

比嘉 石川さん、ああいう人間を、事務所に入れるのは反対です。

石川 （笑い）まずいか。

比嘉 党の印象が悪くなります。石川さん、あなたは、沖縄独立を掲げる我が党の代表です。そして、沖縄の将来を担う人です。

石川 買いかぶらんけ。

比嘉 戦果アギヤーとは、手を切った方がいいと思います。米軍との駆け引きも性急すぎますよ。石川さんらしくありません。

石川 おれの目的はあくまで、沖縄の独立さ。どんな手を使っても、独立を勝ち取るよ。

比嘉 ……でも、石川さんには、独立後の統治もやって貰わなくては困ります。あなたは自分の力がわかっていないんです。私は石川さんが、ウチナーの代表になるためなら、たとえ火の中にだって、飛び込む覚悟がありますよ。

石川 （笑う）そう力まんけ。今は沖縄独立後のことより、アメリカとの交渉が大事さ。

比嘉 そのことですが、石川さん、やっぱり、やめましょう。

石川 そうかね――。

比嘉 あの戦果アギヤーの金城のためですか？ 石川さんは、金城の意見を受け入れ過ぎます。原爆を材料に、アメリカと取引するなんて無謀すぎますよ。交渉に失敗したら、党がア

メリカ側に潰されるのは目に見えているじゃないですか。

石川 比嘉。賭けよ、これは。

比嘉 賭け？

石川 沖縄からアメリカを撤退させる最大のチャンスよ。

比嘉 危険すぎます。

石川 党の存続を賭けるに見合うだけのチャンスさ。だから、おれは決断した——。

比嘉 もう、決断は変わりませんか？

石川 おれは党首として、党の存亡を賭ける。金城もそれなりのモノを賭けておれに、この話をもちかけてきよった。

比嘉 買いかぶりです。あんなチンピラーが何を賭けているというんですか！！

石川 又チ、命さ。

比嘉 あれたちは何も考えていないだけです。

石川 比嘉、おれたちの党の目的は組織の維持存続ではないだろう。沖縄の独立よ。米軍基地があつては、独立はできない。

米軍の撤退はその為の必要条件さ。

比嘉 交渉はやめましょう。

石川 賭けは、はじまつてるよ。

比嘉 困ります——。

石川 (笑い) そんなあ顔するのは、俺の前だけにしとけよ。党幹部のおまえがそんなあ顔をしてたら、人の心を動かすことはできない。

比嘉 (うつむく)——。

石川は、琉球空手で比嘉に襲い掛かる。比嘉も応酬する。

互角の戦いである。

戦いはこう着したまま——。

石川 琉球空手の由来を知ってるか？ 沖縄が江戸時代に、薩摩の支配下にあったとき武器をすべて奪われた。薩摩に逆らわんようにさ。だったら、素手で戦うまで、と生み出されたのが琉球空手よ。ウチナーンチュウの魂が生きている。

比嘉 でも、中国には、日本びいきでないように見せるため、日本人の象徴であるふんどしをやめました。人の顔色をうかがう精神性は、いまだに残っています。

石川は一升瓶を取り出す。

石川 沖縄の悲しい歴史は置いといて、一緒にシマ酒呑まなか——。

比嘉 石川さんは沖縄のリーダーになる人です。私は確信しています。

石川 だったら、呑みながらしゃべるか――。

石川は茶碗を二つ並べる。

人の様子をスマミスが隠れて裏で見ていた。

――暗転

米軍基地・ブランソン司令官の執務室――。

午前中。

ブランソンがいる。

ブランソンはイライラしながら、パイプを吸っている。

ドアをノックする音がする

スマミス 失礼します。

ブランソン なんだ！！

スマミスが入ってくる。

スマミス 司令官、琉球独立党に関する有益な情報を得ました、ぜひ司令官に会っていただきたい人物がいます。

ブランソン ……誰だ？

スマミス 琉球独立党のナンバー2・比嘉という男です。石川の補佐をしている人物です。

ブランソン 石川の補佐？

スマミス はっ。比嘉は、今回の交渉に関して、石川と対立しています。そこで司令官には比嘉と新たな取り引きをしていただきたいのです。

ブランソン 取り引き？

スマミス はっ。やつらから原子爆弾を取り戻す代わりに、これからアメリカが統治する沖縄の政治組織の中枢に、現在候補の沖縄民政府準備委員会でなく、琉球独立党を据えるという取り引きです。

ブランソン どういうことだ？

スマミス はっ。私の調査では、比嘉という男の望みは、沖縄独立を目指す石川と少し異なります。琉球独立党が、沖縄の政権党になり、比嘉が心酔している石川を沖縄政府のトップに据えることにあります。

ブランソン 典型的な参謀タイプということか。

スマミス 比嘉は、琉球独立党が、原爆を切り札に我々と交渉を

。することを怖れています。交渉に失敗する可能性が高いと

ブランソン まともな男じゃないか――。

スミス はっ。したがって、我々は、石川ではなく、比嘉と交渉をするのです。

ブランソン あの男か――。

スミス 原爆の引渡しと琉球独立党を政府の中心に据えるという約束を交換するのです。琉球独立党が沖縄政府の主要政党になったところで、我々には全くと言っていいほど不利益はありません。

ブランソン そうだ――。

スミス 比嘉に会っていただけますか？

ブランソン わかった。

スミス (舞台袖に向かって)おい！

スミスに呼ばれて部下のマイクが走ってくる。

スミス 比嘉を呼んでこい。

マイク はっ。

ブランソン 手回しがいいな、スミス！ お前の昇進について、考えなければな。

スミス ありがとうございます。

ブランソン お前より家柄がいいというだけで、手柄の少ないマリーダ・ヘンデルが上官に座っているというのも困ったことだと思っていた。

比嘉が部屋に入ってくる。

比嘉 失礼しましょうね――。

ブランソン よくきてくれた。

比嘉に手を差しだすブランソン。

比嘉 ゆっくり話を聞かせて貰えますか――。

比嘉はブランソンの手を握る。

――暗転

アギヤー部落の広場――。

昼下がり。

舞子、凜、加奈、ユタが『あしびな』を踊っている。

舞子 凜、手指が伸びてない。

凜 はい。

舞子 琉球舞踊は、指が美しくないと。香奈、足の捌きが違うよ。重心もつと前ね。

香奈は頑張るが――。

香奈 もう、駄目。これ以上、踊れん。

舞子 足の捌きも美しくないと、綺麗に見えんよ。

香奈はへたり込む。

ユタも一緒にへたる。

ユタ あいやー。

舞子 こんなんで音あげるな。

ユタ はっさ、きついろ。

舞子は一人で踊る。

三人は呆気にとられている。

舞子が踊り終わる。

凜 うちたち、そんなにうまく踊れんよ。

舞子 上手い、下手じゃない。今回のエイサーは、ウチナーンチュウの魂を揺さぶるものにしたってば。

凜 魂を――。

香奈 揺さぶる――。

舞子 私が七つのおきのエイサーは、見る人全てに鳥肌が立ちよった。私の踊りの先生が、仕切ったエイサーだったよ。踊りが上手いとか下手だとか、そんなものはどうでもいいこと。踊り手の魂が波打って、その波が空気を揺らす。踊り手と見物客の心が震える。心の震えが、四方を取り囲む海の波と重なる。こちらはウミンチューさ。海の遙か彼方、ニライカナイで生まれて、海とともに生き、やがて海に帰る。それがウミンチューの一生。そんな命の巡りが、肌でわかるようなエイサーだった。先生には遠く及ばないけど、一度でいいから、魂が震えるエイサーやってみたい。私の夢よ――。

凜 どうやればいいのかな。

舞子 それがわかれば、苦労はないさ――。先生は、生き方以上の踊りは踊れない、って言ってたよ。

凜 生き方か——。うちたちの生き方って、いいのかな。

香奈 盗賊よね。戦果アギヤーって。

舞子 やしが、アギヤーなしじゃ生きていけない。何のために

アギヤーやるわけ——。そう、ヌチドウ、タカラさ。

香奈 そうかあ、生きるためには、破れかぶれか——。

凜 破れかぶれ、いいね。

ユタ うん、破れかぶれ。

舞子 そう、破れかぶれ。ちゃんとわかっているね。捨ててこ

そ浮かぶ瀬もあれ、よ。どこからでもかかってこい、矢でも

鉄砲でもきたらいいさ。うり、もう一丁行くよ。

一同 うりうり。

一同、踊り始める。

——暗転

鍾乳洞——。

ブランソン、スマス、マイク、比嘉が歩いている。

足を止める比嘉。

比嘉 原子爆弾はこの先にあります。

ブランソン そうか——。

比嘉 約束は守られるですよね——。

スマス 心配することはありません、あなたの行為は石川さん

への裏切りにはなりません。琉球独立党にとって最良の選択

だ。彼はあなたに必ず感謝します。

比嘉 この契約書は有効ということですね——。

比嘉は、懐から文書を取り出す。

スマス ブランソン司令官は、サイン入りの覚書をキチンと交

わされたのだ。それはGHQの公務文書だ。

ブランソン そうだ。必ず履行されなければならない。あれば

だがな——。

比 嘉 あれば——？

ブランソンは懐から拳銃を抜き出し比嘉に突き付ける。

比嘉 どういうことですか！

ブランソン なければ履行する必要はないという事だ。

スマス 司令官——。

比嘉 何だよ！！

スミスはブランソンの銃を持つ手を抑える。

スミス 司令官——。

ブランソン 貴様、俺に刃向かうのか。

スミス 司令官！！ 困ります。

ブランソン 覚書の内容は、お前が勝手に考えたことだ。

スミス 司令官——。

その時、ブレーカーが落ちるような音がして、鍾乳洞が闇に包まれる。

ブランソン どうなった。

スミス 停電のようであります。ブレーカーが落ちたようです。ブランソン 懐中電気をよこせ。

スミス 申し訳ありません。

ブランソン ないのか？ 役立たずめ。ともかく原子爆弾は取り返した。暗闇に目が慣れ次第、持ち帰れ。マイク はっ。

前場より、少し離れた場所。

暗闇の中、石川が比嘉の腕を引き、歩いている。

比嘉 石川さん——。

石川 送電線を切った。

比嘉 なじえ？

石川 おまえの様子がおかしかったから、後をつけさせてもらったさ。

比嘉 石川さん——。

石川 どうよ？ 暗闇の中で、うまく動けるもんだろ。

比嘉 ——。

石川 おれは、戦時中、このガマを防空壕にずっと使ってたさ。

立ち止まる比嘉。

比嘉 石川さん。申し訳ありません。私は取り返しのつかないことをしてしまいました……（泣いている）。

石川 泣くほどのことじゃないよ——。取り返しのつかないことは、この世にはない。

比嘉は膝をつく。

比嘉 原子爆弾は、米軍の手に――。

石川 (高笑い) そんなことは心配さんけ。今は逃げるのが先決さ。うり、出口はこっち。行け。

比嘉 石川さん!!! (前に行く)

鍾乳洞の出口からマリーダが懐中電灯で照らしながら入ってくる。

マリーダ 動くな。

拳銃を向けるマリーダ。

両手を挙げる石川。

石川 恐ろしい眼をしてるな、あんた。

マリーダ おまえたちがそうさせたんだ。

石川 お前たち――？

マリーダ アメリカ軍の将校だった私の婚約者は、おまえたち沖繩の人間に殺された。

石川 戦争か？

マリーダ 私はおまえたち沖繩の人間が憎い。沖繩の人間をすべて殺したいほど憎い。

石川 俺たちだって、肉親も友達も戦争で失った。……戦争の痛みはウチナンチュウもアメリカ人も同じさ。

マリーダ 違う。少なくとも私は――。

石川 あんたの婚約者は死んでも、あんたはこれからも生きていく。自分の後ろにある憎しみの心で、前を見るのは間違っている。

マリーダ 知った風な口を利くな！ おまえに何がわかる!!!

石川 待て、焦らんけ――。

マリーダ 私の婚約者は、任地の渡嘉敷島で日本兵に捕虜として捕らえられ、さんざんなぶりものにされて殺された。

石川 なに？ 渡嘉敷島……。おれも渡嘉敷島で戦っていたけど、捕虜のアメリカ兵を惨殺したという話は聞いたことがないな。……捕虜は一人だけだった。それも、将校ではなく若い二等兵よ。

マリーダ 嘘だ――。

石川 戦場というのは、話が間違っって伝わる場所さ。本当のことは胸にしまっておく場所だからな。その二等兵から、米軍

師団長の横暴を聞いたことがある。師団長は、地上戦では、ゲリラ兵と民間人の区別はつかないから、敵国人は全て射殺せよと命令した。やしが、その命令に反対した将校がいた。民間人を戦争の巻き添えにすることはできない、と上官の命令を受け入れようとしなかった。将校は、上官の命令に従わなかったという軍紀違反で射殺されたらしい。

マリィダ ……デタラメをいうな。

石川 その将校の名前は、たしか、ジェームスといった。ジェームス・ロックウエル。

マリィダ ——ジェームス・ロックウエル。

石川 捕虜の二等兵が、その将校を慕っていて、将校の話をよくしていたから、はつきり覚えているよ。——俺が渡嘉敷島で覚えていることの全てさ。

遠くから銃声がする。

石川 危ない。

石川はマリィダを伏せさせようとする。が、マリィダは応じない。

石川 流れ弾に当たると。伏せれ！

マリィダは動かない。

マリィダ ……。

比嘉 はいく——。(匍匐しながら先に行く)

石川 出ると。はいくしれ！

銃を降ろすマリィダ。

マリィダ (放心している) ——。

石川 ——後ろには何も落ちていない。お宝は前にある。前を見れよ。

マリィダは、出口へと向かう。

銃声が聞こえる。

石川は、比嘉をかばう。

石川 はいく、行くど。

次の銃声が聞こえると、石川の胸を銃弾が貫く。  
石川が倒れる。

比嘉 石川さん！！  
マリィダ 石川さん！！

うろたえる比嘉。

比嘉 ……石川さん、石川さん！ 石川さん！！  
マリィダ 駄目だ。急所に当たっている。

石川 自分の命は、自分が一番大切にしているもののために使えよ。又チドウタカラさ。

石川は息絶える。

比嘉 石川さん！ 石川さん！！ 石川さん！！！！

銃声が続く。

マリィダ (比嘉に) ……逃げる。  
比嘉 ……(呆然)。

比嘉に拳銃を向けるマリィダ。

マリィダ ……逃げるんだ！！  
比嘉 ……うわーっ！！

混乱したままに、鍾乳洞をでていく比嘉――。

マリィダ ―――。

ブランソンとスミスがやってくる。

ブランソン それは石川か？  
マリィダ はい――。

ブランソン 一緒にいた比嘉はどうした？  
マリィダ 逃げられました。  
ブランソン 何！？

マリィダ 司令官。  
ブランソン なんだ！！

マリィダ 私がここにいるのはわかっていたはずですよ。私にこ

ここで比嘉が出てくるのを阻止しろと命じたのは、司令官です。ブランソン そうだ——。

マリィダ 私がいるのに、なぜ撃てと命じたのです？

ブランソン なぜ——？

マリィダ ——。

ブランソン いかなる状況でも、敵がいれば撃つ。それが私のやり方だ。

怒りに震えるマリィダ。

ブランソン いかなる戦いでも、戦いには勝たねばならん。それが軍人の務めだ——。

マリィダ 味方を犠牲にしてもいいのですね——。

ブランソン その怒りは、憎き沖繩人たちにぶつけろ。優秀な軍人なら避けられる。君にはその力がある。比嘉を追うぞ。

鍾乳洞の出口に向かって歩きだすブランソン。

マリィダ ——。

マリィダは、ブランソンの背中に銃を向ける。

スミス マリィダ・ヘンデル中佐——。

ブランソンは鍾乳洞から去っていく。

銃を降ろすマリィダ。

ほっとするスミス。

マリィダ スミス少佐、ひとつ聞きたいことがあります。

スミス はっ、难道でしょうか？

マリィダ あなたは戦時中、渡嘉敷島の上陸部隊で、私の婚約者・ジェームス・ロックウエルと同じ隊にいましたね。

スミス はっ。その通りです。私は配属後すぐに負傷し、アメリカ本国に戻りましたので、僅かな期間でしたが。急にどうされたのですか？

マリィダ そのときの師団長は、ゲリー・ブランソン中將でしたね。

スミス そうです。我々の司令官です。

マリィダ やっぱり——。

スミス それがどうかされましたか。中佐——。

マリィダ いくつもの疑問が、たった今解けました。

鍾乳洞を出て行くマリィダ。

スミス 中佐……。

マリィダを追って鍾乳洞を出て行くスミス。

——暗転

アギヤー部落——。  
夕方。

金城たちが、石川の遺骸を取り囲んでいる。  
アギヤーたちはすすり泣いている。

金城は、石川がいつもしている鉢巻を取ってやる。

比嘉 石川さんは、自分の命は、自分が一番大切にしているもののために使え、と仰いました。ヌチドゥタカラさと——。

剛史が比嘉に掴みかかる。

剛史 石川さんは、お前をかばって死んだんだろう！！ お前の命のどこが大切だば！！ どこがよ！

剛史は泣き崩れる。

比嘉 すいません。

寛太 すいませんで、済むか！

寛太は比嘉に掴みかかる。

金城 やめれ、寛太。

剛史 タンメー！！ これは勘弁ならない！！ これがすべてぶち壊しよった！！ 石川さんは死に、原爆はアメリカの手に渡った！！ 俺たちはどうなるば。どうすればいいば！！！！

比嘉を殴ろうとする剛史。

金城 やめれ。

金城に言われ、比嘉を殴ろうとする手を止める剛史。

木塚 (金城に) このアギヤーの部落は……。

舞子 なくなるよ。明後日には、ブルドーザーが来て、滑走路の工事が始まる。

木塚 エイサーは。

舞子 できるわけないやし！

木塚 では、この部落は——。

剛史 バラバラア！！ バラバラアさあ！！

木塚 そんな——。

金城たちの間に沈黙が流れる。

沈黙の中、金城が口を開く。

金城 (笑う) 様にならないな、俺たちが深刻な顔をしてても。俺たちが、こんな顔をするのを石川さんが喜ぶと思うか——？  
ハハハ。

舞子 タンメー、無理しなくていいよ (石川の遺骸を見る)。

嗚咽する比嘉。

比嘉 申し訳ありません。

再び、沈黙が流れる。

金城が口を開く。

金城 やろう。

舞子 はっ？

金城 エイサーやろう。

一同 ——。

金城 石川さんは、自分の命は自分が一番大切にしているもののために使え、つて言ったんだろ？ 明後日——。予定通り、この場所でエイサーを決行する。

一同 ……。

金城 命の保証はない。出る、出ないは自由さ。いいか。

一同 ……。

金城 ——今日は石川さんの弔いをやろう。

『ファムレウタ』を唄い、踊る。

——暗転

米軍基地・ブランソン司令官の執務室――。  
夕方。  
ブランソンにマリーダが近づく。

マリーダ 司令官。  
ブランソン どうしたんだ？

マリーダはファイルをブランソンのテーブルに叩きつける。

マリーダ 沖縄戦の作戦記録です。  
ブランソン それが何か――。

マリーダ 司令官、あなたは渡嘉敷島の上陸作戦中、部下の将校に制裁を加え、死亡させた。

ブランソン そんな事実はない。(ファイルを示し) 調べればわかることだ。

マリーダ この記録には矛盾があります。  
ブランソン それで？

マリーダ 沖縄方面第六師団師団長、ゲリー・ブランソン中将が、ジェームス・ロックウェル少佐に制裁を加え、殺したとするならば、この記録の矛盾が解決します。

ブランソン 戦場ではゲリラ兵と民間人の区別はつかん。民間人のふりをして近づく、ゲリラ兵に何人部下を殺されたと思っっているんだ。戦場では、敵国人は全て敵だ。躊躇なく倒さなくては、戦争に勝つことはできない。

マリーダ ロックウェル少佐は、正義を愛する人でした。  
ブランソン 戦争では、勝った者が正義なのだ。

マリーダ――。  
ブランソン 沖縄戦で、お前の婚約者が死んだことだけは事実だ。ならば、お前の婚約者を殺したのは沖縄の人間だ。

マリーダ――。  
ブランソン 違うか――。

ブランソン これ以上、私に対する申し立ては許さん。

そこにスマスが入ってくる。

スマス 失礼します。

ブランソン 何だ。

スマス 滑走路予定地にあるアギヤー部落の住人が、エイサー

の準備を続けているとの報告が入りました。

マリーダ——。

ブランソン 強がりをも——。今は意気盛んでも、実際に銃を向けられれば、現実を引き戻される。蜘蛛の子を散らすように、逃げ去っていくものだ。万が一、逃げない馬鹿者がいれば、皆殺しにするのみだ。

マリーダ——。

ブランソン もし、やつらが部落から立ち退いて、他の場所で、祭りをしようとしても、絶対に阻止してやる。沖繩の人間から誇りを奪うのだ。誇りを失った人間は打算でうごく。上目づかいでこちらを見る。そのためには、たとえ髪の毛一本ほどの誇りも与えるな。この沖繩を、アメリカ軍の完全な統治下に置くために、沖繩の人間から、誇りを根こそぎ奪い、植民地根性を植え付けるのだ。

マリーダ——。

ブランソン 我々は沖繩のすべての人間を手なずけて、飼育しにする。それが我々に与えられた任務だ——。

ブランソンとスマスは去る。

佇むマリーダ。

——暗転

アギヤー集落。

夜——。

見張りをしている金城に木塚が声をかける。

木塚 タンメー。

金城 何か——。

木塚 僕に考えがあるんですが——。

金城 考え——？

木塚は、金城に耳打ちをする。

金城 ……。

木塚 どうでしょう？

金城 ……。

——暗転

米軍基地 廊下——。

夜――。

マリィダが血相を変えて歩いている。

後ろから、スミスが必死で押さえようとしている。

スミス 落ち付いて下さい。

マリィダ 止めないで――。

スミス どこに上申するのでしょうか？ GHQですか？アメリカ国務省ですか？ どこにかけあっても無理です。ブランソン司令官の沖縄戦での功績は絶対です。不問に付されるに決まっています。そんなことをしたら、あなたは上官の命令に背いたという軍紀違反で、除隊です。いや、軍法会議にかけられるかもしれない。

マリィダ 覚悟の上です。

スミス それはアメリカ陸軍の兵士としての判断ですか？それとも一人の男を愛した女としての判断ですか。

マリィダ 私はアメリカ兵士である前に、女である前に、一人の人間です。

スミス ここは軍隊です。戦場です。我々に出動命令が出ています。これからアギヤー部落の強制撤去が始まります。反対住民は射殺してよいと通達がありました。住民にもその旨が伝わっております。

マリィダは去る。後を追うスミス。

――暗転

アギヤー部落――。

夜明けが近い。

アギヤーたちは、飾り付けの準備に余念がない。

金城は、盆に載せた握り飯をアギヤーたちに配って歩く。

金城 いよいよ今日だな。悔いのないエイサーをやろう。

金城は、譲二に握り飯を渡す。

譲二 俺は、本島で一旗揚げるといって、奄美大島を出てきた。でかい旗が揚がる。本望よ――。

寛太は、絵を描いている。

金城は寛太に、握り飯を渡す。

寛太 これ以上上手く描けないというぐらい、いい絵が描けたってば。

剛史 俺達はみんな元はアギヤー漁の漁師さ。一回海に飛び込んだら、死んでもおかしくない。一回死んで、新しく生まれ変わる。その繰り返し。丘に上がっても同じさ。今日死んでも、明日は海の彼方で新しい自分が生まれる。

金城は、舞子に握り飯を渡す。

舞子 私の死に別れた亭主は、弱い男だった。すぐに酒に逃げてしまう。今度生まれてくるときは、タンメーのような強い男の嫁になるう。

金城 (凜、香奈に) お前たち、覚悟はいいか？

香奈 うちたちはネーネーと一蓮托生よ。

凜 悔いはないさ。

ユタは、盆の米を動かして、占いをしている。

金城 ユタ。俺たちの運勢はどうよ？

ユタ あい、米粒が右に七つ。左に八つ。大吉だね。運がいいさあ。勝ち戦よ。右に八粒だったら、大凶だったところだね。

金城は、ユタが右手に隠し持っていた米粒をとる。そして、食べる。

金城 ——大吉やさ。

譲二 俺たちは、幸せだな。

寛太 思い残すことはないな。思う存分俺たちの祭りをやろう。何の心残りがあるば。

舞子 そうよ。幸せなんじゃないか——。

金城 だったら、幸せを身体一杯に表さないとな。

譲二 どうやるば？

金城 こうさ。

金城は、腹の底から笑い始める。

一同、腹の底から笑い始める。

舞子 幸せだね——。

金城 うり、やるど。

金城は、石川の形見の鉢巻を巻く。

そこにブランソンに率いられた米兵がやってくる。

ブランソン 金城。どういうつもりだ。

金城 今日はエイサーの日よ。エイサーやるつもりさ。

ブランソン 正気か――。

金城 正気でいられるか。六年ぶりのエイサーよ。腹の底から血がたぎっている。

ブランソン (部下に) 構えろ！ 例え一小節でも踊れば、命はない。

金城 撃てるものなら撃ってみ、おれたちの祭りは誰にもとめられん！！

銃を持った米兵たちが金城たちを取り囲む。

金城――。

金城が手を挙げる。

比嘉が、櫓を乗せたリヤカーを引いてくる。

リヤカーが舞台中央に付くと、櫓にかけられていた布を

比嘉が取る。

原子爆弾が現れる。

ブランソン 何！！

スミス それは……。

金城 石川さんが、何の策も講じてないとも思ったか？ 見

くびらんけ。あの人は何手先も読んでいたさ。原子爆弾をた

だで返す訳ないだろう。お前たちに渡した原子爆弾は偽物さ。

こつちにあるのが本物よ！！ 一発でも銃を撃ってみ。この

撥で信管ぶったたくど。

ブランソン 住民を巻き添えにする気か――。

金城 昨夜のうちに、半径二十キロ以内の住民はみんな避難させてある。

動揺する兵士たち。

ブランソン 取り乱すな！！ どうせ偽物だ！！(マリィダに)

回収した原子爆弾が本物であるかどうか、きちんと確認したんだな。

マリィダ それは――。

ブランソン 馬鹿者――。

スミス 基地司令部に、電信で問い合わせています。

ブランソン 急げ。

スミスは、走り去る。

金城 だあ、退却しれ。退却しなかったら、信管ぶったたくど。

金城が、大きく手を振り上げる。

米兵は、後ずさりする。

金城が櫓に登り、太鼓のバチで爆弾の信管を叩こうとする。

金城 これが偽物なら、なんで逃げるば。

ブランソン 逃げたのではない。石コロに足を取られたただけだ。

金城 自分の間違いを、強引に正当化することを何とかというんだったな。

金城は、撥を振り上げ、信管を叩こうとする。

米兵たちは逃げる。

スミスが駆け込んでくる。

スミス ブランソン司令官。基地には原子爆弾の専門家がいな  
いとのことです。本物であるか断定はできないと。また、地  
域住民は至急調査するよう指示を出しました。

ブランソンは兵士たちに叫ぶ。

ブランソン 構えろ！！ 構うことはないぞ！！やつらも信  
管を叩けるものか。

銃を一斉に構える兵士たち。

兵士達 ——。

マリーダが兵士たちの前に立つ。

マリーダ やめる！！ 撃つな！！

ブランソン マリーダ！！

マリーダ 司令官、祭りは止めさせません。

ブランソン なに！？

マリーダ もし、止めるなら覚悟をしてください。

ブランソン 覚悟——。

マリーダ 命までとろうとはいいません。しかし、怪我をすることになります。

ブランソン なにをいつているのかわかっているのか？ 貴様。

マリーダ 米国軍人を捨てる覚悟はできています。

ブランソン いい度胸だ——。

ブランソンは兵士たちに叫ぶ。

ブランソン 撃て！

マリーダ 撃つな！

戸惑う兵士達。

兵士たちは、スミスをみる。

スミス 撃つな！！

ブランソン スミス。貴様。

スミス 司令官、この命令に従えば、私の今後の昇進に悪影響がでてきそうです。

ブランソン 何だと——。

スミス それに、今、やつらを殺せば、化けて出てきそうではないですか。寢床に、毎晩踊りにやってきましたよ。

ブランソン 撃て——！！ 貴様ら——！！

マリーダ 銃を降ろせ！！

兵士達 ——。

ブランソン 撃て——！！！！ 撃て——！！ 撃て——！！！！

兵士達 ——。

銃を捨てブランソンに敬礼し、去っていく兵士達。

力なく地面に膝をつくブランソン。

ブランソン ……。

ブランソンたちのやりとりをみていた金城が、櫓から降りてくる。

木塚が金城に駆け寄る。

木塚 やりましたね！！ タンメー！！

金城 うりひゃー、やると。俺たちのエイサーを。

エイサーが始まる。  
踊り続けるアギヤーたち。  
他のアギヤーも加わり、祭りの輪は大きくなっていく。

——暗転

米軍基地 廊下——。  
夕方。

マリーダがスミスを説得している。

マリーダ 今回の件は、私一人の責任です。あなたが連座する  
必要はありません。

スミス いや、私も覚悟してやったことです。

マリーダ 私は独り身です。仕事を失っても、自分一人なら何  
とかやっていきます。

スミス しかし——。

マリーダ あなたには、愛する妻と養育しなければならぬ子  
供がいます。軍人しかやったことのないあなたが、他の仕事  
に就くのは容易ではありません。

スミス 御配慮、感謝します。

——暗転

アギヤー部落——。  
夜。

金城たちは勝利の美酒に酔っている。  
女たちは、自慢の踊りを披露している。

譲二 しかし、流石は石川さんさ。本物の原爆を隠してたなん  
て。

剛史 ホントホント。心臓止まるかと思ったださ。

金城 いや、あれは偽物さ。

寛太 偽物？

金城 こいつ(木塚)が作ったハリボテさ。

ユタ ハリボテ……。

一同 ハリボテ！

一同は驚愕する。

金城 俺もこいつに言われたとき、どえれえ驚いたさ。ハリボ  
テの原爆で、米軍と戦おうって言われてよ。

木塚 タンメーのおかげです。タンメーなら、ハリボテだろうと、米軍に勝てるって僕は信じてましたから。

木塚に酒を注ぐ寛太。

譲二 木塚。お前、いいところあるな！！

塚 いや、そんな――。

剛史 一人前に謙遜さんけ。

剛史は木塚の頭を小突く。

寛太 一回見たものを、何でも絵にできるって言ってたな。だからあんな本物みてえなハリボテが作れたのか。すごい才能だな。

木塚 ありがとうございます。

剛史 少しは謙遜しれ。

剛史は、木塚の頭を小突く。

舞子 タンメーもよく私たちを騙してくれたよね。

金城 人聞きの悪いことをいわんけ。

一同、笑い。

木塚 僕、ここにきてビックリの連続です。体中に力が漲ってくるんです。次の作品が描ける気がしてきました。

木塚にカメラを返す剛史。

剛史 うり。

譲二からカメラを受け取る木塚。

木塚 ああ！！ そういえば……、忘れていましたよ、カメラのこと。

笑う一同。

そこに、マリィダがやってくる。  
マリィダを警戒する一同。

金城 立ち退きのことか？

マリィダ いえ、滑走路建設は一時中止になりました、ブランソン司令官は、一時的にはいえ原子爆弾が奪われた失態が本国に知れ、更迭されることになりました。

金城 そうか。

マリィダは比嘉に近づく。

マリィダ 比嘉さん、私はあなたに伝えたいことがあり、ここにきました。

比嘉 わたしに？

マリィダ 後ろではなく、前を向いて生きなさいと。それを私の口から、あなたに伝えたかった。

比嘉 ありがとうございます。

マリィダ 私はアメリカ軍人をやめます。(辺りを見渡して) こんなに空が青くて、海はこんなにひろい。こんなに大きなものが、今まで目に入らなかった――。

舞子 この空も海もアメリカと繋がってるんだよね――。

金城 あんたも、飯、食べてけよ。

舞子がマリィダを座らせようとする。

舞子 そうよ、うりうり。

マリィダは笑みを浮かべて、

マリィダ ……ありがとうございます。

木塚が一同に――。

木塚 みなさんの写真を撮らせてもらえないでしょうか？

寛太 (笑い) ハハハ、いいね。撮ろう、撮ろう。

金城 とお。

カメラを構える木塚。

写真を撮る為に、移動する一同。

マリィダと比嘉は写真に入ろうとしない。

金城 あんたたちもさ。

舞子 うりうり。

舞子、香奈、凜が、マリィダを写真の中に入れようとする

る。

マリータは写真の輪に入る。

比嘉だけが、残る。

金城が比嘉に――。

金城 どうしたば？

比嘉 私は、これで失礼します。

剛史 えー。

比嘉 いいんです。私はここにいられるような人間ではないです。すから。金城さんは私が憎くないのですか？

金城 憎くない。これっぽっちも憎くない。

比嘉 私が至らないばかりに、石川さんは亡くなられてしまった。……あの時、石川さんではなく、私が死ぬべきだったんです。

金城 それは済んだことさ。俺たちは前を見て、前に向かって進まんと。

そのとき、ブランソンが現われる。

舞子 ブランソン！

ブランソン 金城――。

ブランソンは銃口を金城に向ける。

比嘉 あんた、何人ウチナインチュウを殺す気か。

ブランソン 日本はアメリカの統治下だ。やがて日米地位協定が締結される。俺たちが沖縄の人間を何人殺しても、罪に問われることはない。

比嘉は金城の前に立つ。

ブランソン 比嘉、そこをどけ！

比嘉 どきません――。

ブランソン どかないのなら、お前も一緒だ。

ブランソンは、引き金を引く。

その刹那――。

金城がブランソンと比嘉の間に、割って入る。

ブランソンは金城を撃つてしまう。  
倒れる金城。

一同 タンメー!!!  
剛史 くぬ野郎!!!

剛史は、ブランソンの銃を蹴りあげる。銃を寛太がキャッチする。

寛太 うり。(剛史に放る)

剛史はブランソンに銃を向ける。

剛史 くるさりんど。

金城 やめれ、剛史!

ブランソン ちっ!

ブランソンは悔しそうに走り去る。

金城に駆け寄る舞子。

舞子 タンメー!

比嘉 なじえ! なじえ、私なんかを。

金城 あんただからさ。

比嘉 私だから――。

金城 あんたならウチナーを救うことができる。

比嘉 そんな――。

金城 石川さんが命を賭けて救った男なんだから、あんたは。石川さんは一番大切なもののために、命を使った。石川さんがなじえあんたを守ったか考えれ。

比嘉 なじえ――。

金城 おれたちは戦果アギヤーさ。ウチナーチュウの魂は誰より知っているが、政治はできない。やしが、あんたには政治ができる。米軍と対等に渡り合って、沖縄の自主独立を勝ち取るには、あんたの力が必要さ。石川さんは、命をかけてそれをあんたに教えようとしよった。やれるか?

比嘉 (力強く) やります。

比嘉の腕を握る金城。

金城の手を握り返す比嘉。

比嘉 約束します。

金城 上等――。ウチナーの空は、明るいなあ……。

息絶える金城。

金城の元に集まる戦果アギヤーたち。

一同 タンメー!!!

戦果アギヤーたちの泣く声が、響き渡る。

——暗転

木塚(N) こうして祭りは終わった。彼らの聖地である部落を、滑走路にするという計画を米国は中断せざるをえなくなった。戦果アギヤーは米軍の統治体制の変化に伴い、一九五二年頃沖繩から、歴史から消え去った。

木塚のアパート——。

一カ月後——。

夕方。

木塚が、原稿を描いている。

横で編集者の村岡峰子が原稿を読んでいる。

木塚 よし。

最後の一枚を村岡に渡す木塚。

木塚 はい、お待たせしました。

村岡 ああ！ よかった！ 間に合いました！ 今から印刷

屋さんに直行すれば、間に合います。

木塚 よかった——。

村岡 木塚さん！ これ何回読んでも面白いです！

木塚 そうですか？

村岡 絶対にヒットします。『ロストアイランド』——。失われた島——。着想が素晴らしい。国家から見捨てられた島で、島民は自分の誇りを捨てずに、まっすぐに生きている。日本中の子どもたちを魅了すること請け合いです。それにテーマが斬新だ。科学は人間を幸福にすることもあるが、不幸にすることもある——。(漫画を示し)この原子爆弾のくだりで、それを使う人間によってどっちにも転ぶことが、ダイレクトに伝わります。画期的な漫画です。ありがとうございませう。  
(腕時計を見て) ああ、印刷屋さんの締め切りが。これで、失礼します！

部屋を出て行くこうとする村岡。

村岡 これは、また、読者もビックリしますよ！ うん！  
木塚 ——。

去っていく村岡。

エイサーの手の動きを少し真似した後、再び原稿を描き始める木塚——。

木塚の絵の中で、ウチナンチュウが踊り始める。

空と海が広々と広がっている。

踊りの輪の遙か上空を、一機のB五十二が横切って行った。

幕